高麗の禪宗

大屋德城

一　華嚴と禪宗

朝鮮の禪宗は朝鮮佛教の主脈を爲すもので、朝鮮佛教史を縱斷する一大主潮である。抑朝鮮には古來多くの宗派があり支那佛教の殆ど多くが半島に傳はつたのではあるが、唯一時的現象に止りて、後繼者もなく、其儘になつて了つたものが少くなく、中に就いて、比較的長期に亘つて、生命を有つてゐたのは、前後唯二宗あるのみである。卽ち高麗朝の頃迄は華嚴宗が半島佛教の主脈であり、高麗朝の中期から、李朝にかけては、禪宗が主脈である、隨つて、半島佛教の上半期は華嚴宗の時代であり、下半期は禪宗の時代である。

華嚴宗の時代に於いては、新羅朝に、元曉及び義湘の二大人物があり、元曉は學博くして、諸方面の著述が殘つてゐる。慶州芬皇寺に居つた人で、唐代の佛教家と比肩して下らなかつた。義湘は入唐して華嚴を傳へた人で、此等の人々に依りて、新羅時代には華嚴が行はれた。元曉には華嚴經の疏があつたが、傳はらず、起信論の註釋が今に傳はり海東疏の名を以て呼ばれて居る。義湘の著述は華嚴一乘法界圖などがあつて、新羅の學僧として、僧傳にも載せられてゐるのである。高麗朝に下りては、王子義天が華嚴宗を標榜し、入宋して、晋水の淨源に就いて、華嚴を傳へ、圓宗文類二十二卷、敎藏

總錄三卷を編し、大に經疏を刊行したが、自身の華嚴に關する撰述は傳はらぬ。此頃、躰元といふ人があつて、般若譯の華嚴經中觀世音菩薩の所說の法門に就て、澄觀の疏を釋したものがある。華嚴經中觀世音菩薩所說法門別行疏二卷が之れで、版は現に海印寺に在る。其外、義湘の白花道場發願文を釋した略解といふのが一卷ある。之も版は海印寺に在る。夫から義湘の一乘法界圖を講じた叢髓錄といふのが殘つてゐるが、作者は不明である。又高麗朝には均如といふ學僧があつて、智儼の十句章、法藏の五敎章、三寶章、旨歸章について講義を殘して居る。此等は何れも圓通鈔といふ名で呼ばれてをつて、其版は何れも海印寺に殘つてゐる。此等が高麗朝の華嚴に關する著述の主なるものであらう。而して此等は未だ日本の學界に知られて居ないから、一寸此に紹介してをく。詳には「東洋學報」所載、拙稿「朝鮮海印寺經板考」を參照せられたし。

二　高麗朝の禪

朝鮮禪宗の初期は高麗朝であるが、其の系統は華嚴と禪と調和して起つた禪—詳にいへば、支那唐朝に興つた澄觀、宗密派の禪—であつた。

唐朝は禪の勃興期で、南北兩宗に分れた禪が、南宗の下に於て、青原行思、南岳懷讓の二流に分れ、唐末、五代に及んで、五家七宗を分出する盛況にあつたので、當時再興の華嚴は大に之に接近することを努めた。其の代表的人物が清涼澄觀圭峯宗密である。近時金石文の研究に依ると、北宗の方でも、神秀の下に普寂、義福の二大德があつて、大に敎化を布いたといふ事であるから、後世南宗側の史料だけで考ふるやうに、北宗は忽ち衰へて了つたのではない。南北二宗共に盛況を極めたものである。義福は大智禪師と號す。其墓誌と碑は長安碑林にあり。拓影は「支那佛敎史蹟」第一に收む。圖版三十九——同四十二

宗密が禪と接近して著した代表的著述は禪源諸詮集一百四卷であるが、今は本文失はれて、都序四卷のみが殘つてゐる

其他、澄觀の華嚴經に關する諸疏（隨疏演義鈔九十卷）が有名である。宗密の圓覺經に關する諸疏は、啻に其宗徒に用ゐられたのみでなく、永く後世までも禪宗に用ゐられたのである。（此邊は常に講ずるところである の事から、大略に止めてをく。）

斯くの如き思想を受けて起つたのが、高麗の禪である。而して其首倡者は普照國師知訥である。

三　普照國師知訥

知訥は高麗朝に禪を創めた人である。傳に依れば、京西洞州の人、俗性鄭氏、父は國學々正、母は趙氏、開興郡夫人、生れて多病であつたので、八歲の時、曹溪雲孫宗暉禪師に投じて祝髮受戒し、大定二十二年壬寅、歲廿五歲にして、僧選に中る。未だ幾くならずして南遊して、昌平清源寺に抵り住したが、偶六祖壇經を讀み、「眞如自性起念、六根雖見聞覺知、不染万像、而眞性常自在」の文に至りて、驚喜して獲るところがあつた。大定二十五年乙巳、普門寺に寓し、大藏を閱して、李長者の華嚴論を讀み、重ねて信心を發し、前解轉明かとなり、心を圓頓觀門に潛めた。次で居祖寺に往き、定慧社を立て、承安二年戊午の春、智異山に至り安禪した。時に大慧普覺禪師語錄を得て、「禪不在靜處、亦不在鬧處、不在日用應緣處、不在思慮分別處、然、第一不得捨却靜處鬧處、日用應緣處、思慮分別處參」云々の處に到りて、益得る處があつた。承安五年庚申、松廣山吉祥寺に移り、徒を領すること十有一年、或は道を談じ、或は禪を修し、安居頭陀一に佛律に依つたので、四方の緇白群集し、定慧社を此に移し、常に金剛經を以て法を立て、六祖壇經、李通玄の華嚴論、大慧語錄を以て義を演じ、惺寂等持門、圓頓信解門、經截門の三門を以て接得した。大安二年三月二十日疾を示し、同二十七日に入滅した。師法眼を具し、盥漱して云ふ。「這個眼、不是祖眼、這個鼻、不是祖鼻、這個口、不是孃生口、這個舌、不是孃生舌、」法鼓を擊たしめ衆を集め、六環の錫杖を策き、步して善法堂に至り、祝香昇座常儀の如く、廼ち錫を振ひ、前夕方丈

中問答語句因緣を擧げて云く。「禪法靈驗、不可思議、今日來到這裏、欲爲大衆說破去也、爾等不昧一着子問來、老漢亦不昧一着子答去」左右を顧視し、手を以て之を摩して曰く。「山僧命根、盡在諸人手裏、一任諸人、橫拖倒曳、有筋骨底出來。」便ち足を伸べて床に踞し、問ひに隨つて答へ、言諦に、義諦しく、言辯無碍であつた。最後に僧あり問ひて云く。「昔日毘耶、淨名示疾、今日曹溪、牧牛作病、未審是同是別」師云「爾學同別來」廼ち柱杖を拈し數下して云く、「千種万般、摠在這裏、」杖を執り泊然として逝く。上哀悼して、佛日普照國師の號を賜つた。閱世五十三、臘三十六。

知訥の禪は傳のいふやうに、六祖壇經に依りて始て所得があり、次で、李通玄の華嚴論を讀みて、圓頓の法門に心を傾け、更に大慧錄に依りて開眼したといふのであるから、いはゞ無師獨悟で、禪宗の傳燈を重んずる方からいへば、變則といはねばならぬ。而して、李通玄に私淑するところがあるのは、依然清涼、圭峯の脈を引くものと解せざるを得ぬ。其の曹溪宗と名づくるのは、曹溪大師に因むことは勿論であるが、南宗の禪を何處より受けたかは據るところがない。唯壇經に依つたから、左樣に稱するのであらう。知訥の著述として、今日に傳はつて居るものは、實に左の如く多數であるが、外に語錄もあつたらしい。金君綏の撰した昇平府曹溪山松廣寺佛日普照國師碑銘並序に「生平所著如結社文、上堂錄、法語歌頌各一卷」とあるによりて明かである。

眞心直說　一卷　〔縮刷藏經騰帙に收む〕
修心訣　一卷　〔同上、並に續藏に收む〕
證道歌註　一卷　〔續藏に收む〕
看話決疑論　一卷

圓頓成佛論　一卷
節要私記　一卷
定慧結社文　一卷
誡初心學人文　一卷　〔縮藏〕〔騰帙〕

左に定慧結社文を掲げて、其の宗風の一斑を察しよう。

恭聞、人因地而倒者、因地而起、離地求起無有是處也、迷一心而起無邊煩惱者衆生也、悟一心而起無邊妙用者諸佛也、迷悟雖殊、而要由一心、則離心求佛者、亦無有是處也、知訥自妙年、投身祖域、遍參禪肆、詳其佛祖垂慈爲物之門、要令我輩、休息諸緣、虛心冥契、不外馳求、如經所謂、若人欲識佛境界、當淨其意如虛空、等之謂也、凡見聞誦習者、當起難遇之心、自用智慧觀照、如所說而修、則可謂自修佛心、自成佛道、而親報佛恩矣、然返觀我輩朝暮所行之迹、則憑依佛法裝飾我人、區區於利養之途、汩沒於風塵之際、道德未修、衣食斯費、雖復出家、何德之有、噫夫欲出離三界、而未有絕塵之行、徒爲男子之身、而無丈夫之志、上乖弘通、下闕利生、中負四恩、誠以爲恥、知訥、以是長歎、其來久矣、歲在壬寅正月、赴上都普濟寺談禪法會、一日、與同學十餘人約曰、罷會後、當捨名利隱遁山林、結爲同社、常以習定均慧爲務、禮佛轉經、以至於執勞運力、各隨所任而經營之、隨緣養性、放曠平生、遠追達士眞人之高行、則豈不快哉、諸公聞語曰、時當末法、正道沈隱、何能以定慧爲務、不如勤念彌陀、修淨土之業也、余曰、時雖遷變、心性不移、見法道之興衰者、是乃三乘權學之見、有智之人、不應如是、君我逢此上乘法門、見聞薰習、豈非宿緣而不自慶、返生絕分、甘爲權學人、則可謂辜負先祖、作最後斷佛種人也、念佛轉經、萬行施爲、是沙門住持常法、豈有妨礙、然不窮根本、執相

外求、恐被智人之所嗤矣(中略)、今時行者、多云、但得念佛往生、然後何有哉、不知九品昇降、皆由自心信解大小明昧而發現也、經中以解第一義諦觀進行者爲上品、豈以聰明靈利之心、甘爲鈍根不解第一義、但稱名號哉、萬善同歸集云、九品往生上下俱達、或遊化國見佛應身、或生報土覩佛眞體、或一夕而便登上地、或經劫而方證小乘、或利根鈍根、或定意散意、是知古今達者、雖求淨土以深信眞如、專於定慧、故知彼色相莊嚴等事、無來無去、離於分齊、唯依心現、不離眞如、不同凡夫二乘、不知轉識現智、故見從外來、取色分齊故也、如是則雖曰、同生淨土、愚智行相、天地懸隔、何如現今、學大乘唯心法門、專於定慧、免墮凡小、心外取色分齊之見也、若是祖宗門下、以心傳心、密意指授之處不在此限、琪和尙云、能悟祖道發揮般若者、末李末之有也、故此勸修文中皆依大乘經論之義爲明證、略辨現傳禪門信解發明之由致、並出生入死淨穢往來之得失、欲令入社修心之人、知其本末、息諸口諍、辨其權實、不枉用功、於大乘法門、正修行路、同結正因、同修定慧、同修行願、同生佛地、同證菩提、如是一切、悉皆同學、窮未來際、自在遊戲、十方世界、互爲主伴、共相助成、轉正法輪、廣度羣品、以報諸佛莫大之恩、仰惟佛眼證此微誠、普爲法界羣迷、發此同修定慧之願、嗚呼、衆生之所以往來者六途也、鬼神沈幽愁之苦、鳥獸懷猛狁之悲、脩羅方嗔、諸天正樂、可以整慮趣菩提者、唯人道能爲耳、人而不爲、吾未如之何也已矣、知訥、曩閱大乘、歷觀了義經論所說、無有一法不歸三學之門、無有一佛不籍三學而成道也、楞嚴經云、過去諸如來斯門已成就、現在諸菩薩今各入圓明、未來修學人當依如是法、是故、我輩今結佳期、預伸密誓、當修梵行、則仰慕眞風、不生自屈、以戒定慧資薰身心、損之又損、水邊林下、長養聖胎、看月色而逍遙、聽川溪而自在、縱橫放曠、逐處消時、猶縱浪之虛舟、若凌空之逸翮、現形容於寰宇、潛幽靈於法界、應機有感、適然無準矣、予之所慕、意在斯焉、若修道人、捨名入山、不修此行、詐現威儀、誑惑信心檀越、則不如求名利富貴、貪著酒色、

身心荒迷、虛過一生也、諸公聞語、咸以爲然曰、他日能成此約、隱居林下、結爲同社、則宜以定慧名之、因成盟文、而結意焉、其後、偶因選佛場得失之事、流離四方、未遂佳期者、至今幾盈十載矣、去戊申年早春、契內材公禪伯、得住公山居祖寺、不忘前願、將結定慧社、馳書請予於下柯山普門蘭若、再三懇至、予雖久居林壑、自守愚魯、而無所用心也、然追憶前約、亦感其懇誠、取是年春陽之節、與同行船禪者、移棲是寺、招集昔時同愿者、或亡或病、或求名利而未會、且與殘僧三四輩、始啓法席、用酬曩願、伏望禪敎儒道厭世高人、脫略塵寰、高遊物外、而專精內行之道、符於此意、則雖無往日結契之因、許題名字於社文之後、雖未一會而蘊習、常以攝念觀照爲務、而同修正因、則如經所謂狂心歇處、卽是菩提、性淨妙明、匪從人得、文殊偈云、一念淨心是道場、勝造河沙七寶塔、寶塔畢竟碎爲塵、一念淨心成正覺、故、知少時攝念無漏之因、雖三災彌綸、而行業湛然者也、非特修心之士、成其益也、以此功德、上祝聖壽萬歲、令壽千秋、天下泰平、法輪常轉、三世師尊父母十方施主普及法界生亡、同承法雨之所霑、永脫三途之苦惱、超入大光明藏、遊戲三昧性海、窮未來際、開發蒙昧、燈燈相續、明明不盡、則其爲功德、不亦與徒性相終始乎、樂善君子、留神思察焉、時明昌元年庚戌季春公山隱居牧牛子知訥謹誌

四　禪門拈頌集の編纂

知訥の禪は斯樣にして起つた。而して、此の一派を曹溪宗と呼んで、其法脈は高麗朝を通じて流れてをる。知訥が公山から曹溪山に移り、定慧社を結んだのは高麗神宗の三年庚申であるから、曹溪宗の起原は亦神宗の三年庚申でなければならぬ。而して第二世と爲つたのは、惠諶であつて、姓崔氏、羅州和順縣の人、字は永乙、無衣子と號し、眞覺國師と稱せられた人である。斯人の一代の事業として、曹溪宗の祕鑑とも稱す可き禪門拈頌集三十卷が門弟共の助けに依りて編纂され

た。惠藩は甲午六月廿六日寂、壽五十七、臘三十二。

禪門拈頌集は門人眞訓等と共に、古話凡一千一百二十五則を集め、夫につき諸家の語錄、雜記に就いて、拈、頌、上堂、哄、話、代、別を集めて三十卷と爲し、略して「拈頌」と稱したのである。眞祐十四年丙戌仲冬海東曹溪山修禪社無衣子の序文が附いてをる。然るに、眞祐は金の年號で、五年目に興定と改元、十年目に正大と改元してをるから、固より十四年のある可き筈は無い。若し十四年丙戌の歲を求むるならば、宋理宗の寶慶二年、日本の嘉祿三年、高麗の高宗十三年に當るのである。然るに拘らず、眞祐十四年を用ゐたのは、當時金との交通杜絶し、改元を知らなかつた爲である。卷三十の末に、二種の跋文があるが、文章が切れてをるのは妙である。夫に依れば、一度此三十卷を開板したが、遷都の時（開城から江華京へ遷都の時）携ふることが出來ずして、其本を失した。故に更に三百七十四則を增加して重刊せんとしたが、果さなかつたので、禪師萬宗が大藏分司都監に依りて重刊したのである。萬宗は當代の權臣崔怡（初名瑍）の孼子で、同胞萬全と共に出家し、萬宗は斷俗寺に居つたが、權威を挾んで大に亂暴をやつたことが高麗史の列傳（卷一百二十九、列傳卷第四十二）に見えてをる。二種の跋文を左に出さう。

（一）宗門奧旨布在方冊、學者鞋於披究、先、國師令門人等採集古話凡一千一百二十五則、並拈頌等語要、編爲三十卷、鋟木流行、然諸家語錄時未全備、捃拾未周、以囑于後、遷都時不遑賫持、遂失其本、今曹溪老師翁因其廢更加商搉、摭前所未見諸方公案、添三百四十七則、欲以重鐫、而因緣未契、禪師萬宗般若中來、乘夙願力輸賄于海藏分司、募工彫鏤以壽其（以下欠文）

（二）憑茲彫刊法寶流通功德、奉祝　聖曆遐基儲闈衍慶、晉陽公壽算延綿、身宮怙泰、于戈息靜、朝野和平、自他故誤殺傷

巨細物命、三世結構、萬類冤讎、滅盡惡心、廻授善道、及予衆未來世離諸横難、不滯他途、常生勝族、肢根究備、相好精殊、業障消除、聰智發明、窮佛祖敎、悟自己心、廣洎群迷、徑趣極樂、願者

斷俗寺住持禪師　萬　宗　記

斯書は濟家の碧巖集の類で、曹溪宗では大邊流行した本で、今に以て朝鮮禪宗の玉手箱と爲つてをる。從て種々の未釋が出來て流行した。就中尤も有名なのが、拈頌說話で、妙香山普賢寺に其板が遺つてをる。其他知れてをる末釋を列擧すると、左の通りである。

拈頌事苑　三十卷　普覺國尊一然著〔普覺國尊碑銘并序に見ゆ〕
重編拈頌事苑　三十卷　寶鑑國師混丘著〔寶鑑國師碑銘并序に見ゆ〕
拈頌說話　三十卷　覺雲著〔重刊拈頌說話序に見ゆ〕
禪門拈頌記　三卷　著者未詳
拈頌私記　……　朝鮮白坡著

拈頌說話の由來は重刊拈頌說話序に見えてをる。

往在勝國々朝、以禪法爲干城、禦寇兵延國祚、當時禪學之盛、不在中國之下、是以散聖牧牛翁之嗣法無衣子諧公、裒其禪門諸傑之或拈或頌、或代或別、於本師所說、及乎迦葉以下所示者、散在諸語錄底、編錄爲三十卷文、目之曰拈頌、代別略也、以貽學者、而其語隱略、又多出於內外諸書、反使管見者未免謗蒼々之愆、故龜谷覺雲公憫焉、別爲說話而明之

（下略）

戊午仲夏曹溪山人無用秀演謹序

撰者に就て、右の序文に見えるやうに、龜谷覺雲とする說と、惠諶の門人覺雲とする說とある。龜谷は惠諶を距ること頗る後世の人であるから、恐らく、惠諶の門人たる覺雲の撰であらうといふ。

五　曹溪宗の法脈

曹溪宗の法脈は其後如何やうに續いたか、明瞭を缺く點があるが、曹溪の第四世に眞明國師混元がある。混元、俗姓は李氏、遂安縣の人、法を惠諶に嗣ぎ、定慧社に住し、晉陽公に重んぜられ、其創むるところの禪源寺に住し、戊午歲、上命を以て斷俗寺に住し、至元八年辛未十二月十日寂を示した。享年八十一、臘六十八、師は又淸眞國師に師事し、壬子八月淸眞寂するに及び、囑を受けて、曹溪に住し、第四世と爲つたといふことであるから、曹溪宗は初祖普照國師、二祖眞覺國師、三祖淸眞國師、四祖眞明國師と爲るわけである。而して第五祖は慈眞國師である。

慈眞國師は、諱は天英、俗姓は梁氏、父は宅椿、母は金氏、高宗の二年乙亥に生れ、十二年己丑、眞覺國師に就て得度した。南遊して淸眞國師に謁し、又眞明國師に法要を問ふた。晉陽公の禪源寺を創めた時、眞明に從ふて往き、三十五年斷俗寺に住し、其後諸處に法輪を轉じ、三十九年壬子、淸眞の寂に遭ひ、眞明曹溪を嗣いで、第四世と爲つた時、天英は禪源寺に主となり、四十三年丙辰秋、眞明に嗣いで、曹溪に住した。忠烈王十二年丙戌二月二十九日、高興郡佛臺寺に寂した。壽七十二、臘五十七、曹溪に住すること凡そ三十年であつた。

第六世圓鑑國師、諱は法桓、後沖止と改め、自ら安庵と號した。俗姓は魏氏、定安の人、父紹は戶部員外郎、母宋氏は吏部員外郎子沃の女である。丙子十一月十七日に生れ、十九歲にして登第し、かつて日本に使したことがある。圓悟國師を

禪源社に訪ひ、出家受戒し、四十一歳の時、金海の甘露社に住し、一禪徒の請に應じて一詩を賦したが、文名天下に鳴つた。詩に云く。「春日花開桂苑中、暗香浮動少林風、今朝果熟沾甘露、無限人天一味同」丙戌二月圓悟寂し、其席を繼いで、曹溪の第六世と爲り、壬辰八月疾を示し、癸巳四月十日寂した。壽六十七、臘三十九。偈に多く。「閱過行年六十七、及到今朝萬事畢、故鄉歸路坦然平、路頭分明未曾失、手中纔有一枝筇、且喜道中脚不跌」日本に來たことがある爲か、語錄二卷和刻の本が行はれてをる。大德元年の刊本を、正統十二年丁卯、羅州牧に開板し、正統刊本を延寶八年に覆刻したのである。日本人には面白くない詩だけれど、試に東征頌の一篇を引かう。

東征頌

皇帝御二天下一、神功超二放勛一、德寬包二有截一、澤廣被二無坼一、車共二千途轍一、書同二九域文一、唯殘二島夷醜一、假息二鼎魚群一、但特二滄溟隔一、仍圖二彊埸分一、苟茅曾不レ入、班瑞亦無レ聞、帝乃赫斯怒、時乎命二我君一、一千龍鵲舸、十万虎貔軍、問二罪扶桑野一、興二師合浦濱一、鼓鼙轟二巨浸一、旌旆拂二長雲一、驍勇皆趨レ死、英雄競立レ勳、江思二韓信背一、舟欲二孟明焚一、係レ越奚專レ美、平レ吳不レ足レ云、所レ營應二瞬息一、獻レ捷在二朝曛一、玉帛爭修レ貢、干戈盡解レ紛、元戎錫二圭卣一、戰卒返耕耘、快劍匣二三尺一、良弓櫜二百斤一、四方歌浩々、八表樂欣々、燧燧收二邊警一、風塵絕二塞氣一、當レ觀聖天子、萬歲秦二南重一。

次に、第十世の慧鑑國師がある。慧鑑諱は萬恒、俗姓は朴氏、熊津郡の人、家は儒を以て業とした。出家して、楓岳、智異山等に往き、圓悟に隨從した。延祐己未八月十八日寂す。壽七十一、臘五十八。王哀悼して慧鑑國師の號を賜つた。其他覺儼などの名僧があつて、法脈は高麗の末葉に及んだが、其後は振はなくなつて、滅びて了つた。覺儼は王師となり、

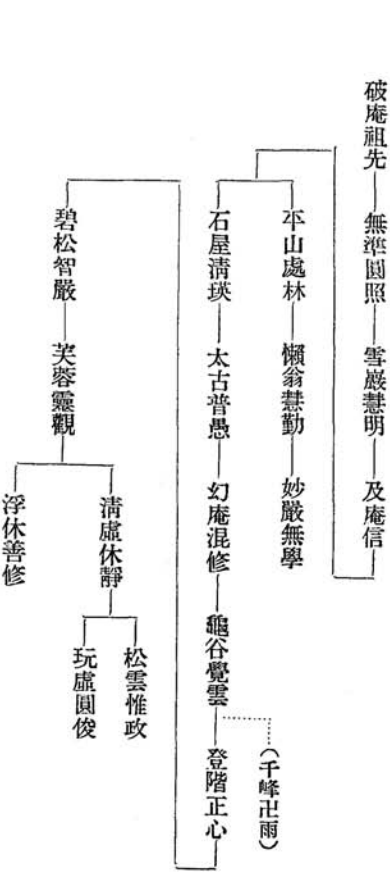
乙未七月廿七日に寂し年八十六、臘七十六、普照國師より十三世といふから、曹溪宗も、知訥より十三世續いたことゝ思はるゝ。而して、李朝の初、世祖の時、佛教を禪教二宗に分ち、禪三宗、教四宗と爲した時に、曹溪宗は禪の一派として名を留めてをる。尤も此の名の下に爲仰、雲門、臨濟、曹洞の四宗を攝したのである。今世祖の定めた、七宗は左の通りである。

- 佛教
  - 禪宗
    - 曹溪宗
    - 總南宗（律宗）
    - 天台宗（天台德韶の法脈、卽ち法眼宗）
  - 教宗
    - 華嚴宗
    - 慈恩宗（法相宗）
    - 中神宗（中道宗卽ち三論宗と神印宗卽ち眞言宗）
    - 始興宗（開城の國清寺を本山とする天台法花宗）

六　李朝の禪宗

無師獨悟の曹溪宗—普照國師知訥を開祖とする—は末に衰へて、支那傳來の禪宗が李朝に興つた。卽ち、太古普愚、懶翁慧勤を中心とする支那流の禪が李朝を通じて、命脈を保ち、其初期に於て隆盛を極めて居る。李朝の禪宗に就ては、稿を改めて說く機會もあらうから、夫に讓り、此には唯其法系の大綱を示し、以て、李朝の禪風を想像せしむるの資料としよう。左に掲ぐるところは、康熙二十七年、普賢寺開板するところの佛祖宗派之圖に就いて、繁を除き、冗を去りて、大系だけを極めて簡單に圖示したものである。卽ち臨濟に、黃龍、楊岐の二派ある中、楊岐派の佛果圜悟の下から、虎丘、

大慧の二派を分出し、前者に松源、破庵の二系あり。李朝の禪は破庵の法系に出づるのである。



七　結　語

高麗の佛教は非常に隆盛を極めたけれど、我が平安朝の佛教のやうに、修法祈禱、法會轉經が多く、從て國家の攘災招福の行事として重んぜられ、義學は振はなかつた。其證據として、當時學僧の撰述の殘らざるに徵しても明かである。大藏を刻すること數回、續藏迄も刻したが、多く、佛力に賴りて、蒙古の來寇を禦ぐ爲であつた。其間に獨り曹溪の一派があつて、心地を明にする法門を開いて民心を指導した事は多とせねばならぬ。假令師承の尋ぬ可きものがないとしても、華嚴の十重唯識觀、三聖圓融觀の如き階梯に依りても、見性の域に進むことが出來ないことはあるまい。我が鎌倉時代の明慧上人の修禪とよく似たところがある。明慧上人一變すれば、曹溪宗とならぬと限らぬ。教宗の觀門を擴充した禪觀は、

達磨一流の祖師禪とは源流を異にするが、行業に至りては、相似の點もある。要するに、高麗朝に興つた曹溪宗は頗る異色ある敎的禪――敎宗の觀門に立脚した禪觀――といはねばならぬ。畢竟するに、清涼、圭峯派の禪が海東に其浪を擧げたと觀るが、正當の觀察であらう。吾人は佛敎史上斯樣な過渡期的現象に特に興味を感ずることを附言して置かう。

（大正十四年二月十三日夜稿了）